

じゅうち
重地遺跡発掘調査報告

2004(平成16)年2月

三重県埋蔵文化財センター

序

三重県は、南北に広がる肥沃な伊勢平野を中心に、山海の恵みを得て豊かな文化を育んできました。なかでも北勢地域は、東海道をはじめ古来より畿内と東国を結ぶ交通の要所として、重要な役割を果たしてきた地です。広範囲に祖先の人々の暮らしがうかがわれる遺跡が散在し、時として私たちに悠久の歴史の1ページを垣間見させてくれます。これらの貴重な財産を、未来に向け子孫たちに残していくことは、私たちに課せられた重要な使命と言えるでしょう。

さて、第二名神高速道路建設に伴って平成9年度から着手いたしました発掘調査も、本年度で6年目となります。当初、古代東海道を想定して開始しました発掘調査ではありますが、調査範囲の中ではその確定を見ませんでした。しかし、重地遺跡としてここにその概要をまとめ、報告することとなりました。今後、地域の歴史解明の一助としてご活用いただければ幸いです。

調査にあたりましては、日本道路公団中部支社、同四日市工事事務所、三重県土整備部高速道推進室、同四日市駐在、三重県企業庁、関係市町村教育委員会、関係機関および地元自治会をはじめとする多くの方々のご理解とご協力を頂きました。末筆になりましたが、厚く御礼申し上げます。

平成16年2月

三重県埋蔵文化財センター

所長 吉水康夫

例 言

- 1 本書は、三重県四日市市伊坂町重地に所在する重地（じゅうち）遺跡の発掘調査報告書である。なお、古代東海道を想定して調査は進められたが、最終的に確定を見るに至らなかったため、字名から重地遺跡とした。
- 2 本書が扱う調査結果は、既刊『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市JCT埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』（三重県埋蔵文化財センター 2000.3）と『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市JCT埋蔵文化財発掘調査概報Ⅴ』（三重県埋蔵文化財センター 2002.3）にその概要を公表しているが、本書をもって正式報告とする。
- 3 調査は三重県教育委員会が主体となり、三重県埋蔵文化財センターが下記の体制で実施した。また、本書が対象とした実調査面積は下記のとおりである。

調査年度	調査担当	発掘作業受託業者	調査面積
平成10年度	調査第二課 田中 久生	リメックス株式会社	136㎡（範囲確認調査）
平成11年度	調査第二課 片岡 博	株式会社発掘建設リンク	778㎡（本調査） 26㎡（範囲確認調査）
平成12年度	調査第二課 木野本和之	国際航業株式会社	290㎡（範囲確認調査）
平成13年度	調査第二課 松田 珠美 角正 芳浩	株式会社鴻池組 三重営業所	400㎡（範囲確認調査）
平成14年度	調査研究グループ 松田 珠美 水本 龍治	株式会社イビソク	489㎡（本調査）

- 4 本書の執筆は松田珠美と水本龍治が、編集は水本龍治が行い、遺物の撮影は水本龍治が担当した。また、青木哲哉氏（立命館大学）には調査地周辺の地理的分析についてのご教示をいただいた。なお、文責は目次と文末にも表記した。
- 5 本書が対象とした現地調査期間は平成11年2月2日から平成14年10月18日である。
- 6 本書で示す方位は座標北を用いた。なお、座標は国土座標第VI系を用いた。当地域の磁北は6度50分西偏している（平成元年、国土地理院）。
- 7 本書では下記の遺構表示略記号を用いた。
SD：溝 SR：流路 P：小穴
- 8 本書で表記する色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（21版、日本色研事業株、1998年）を使用した。
- 9 発掘調査及び本書の作成に際しては、下記の方々・機関にご指導ご協力をいただいた。（敬称略）
青木哲哉（立命館大学）・日本道路公団中部支社・同四日市工事事務所・三重県県土整備部高速道推進室・同四日市駐在・三重県北勢県民局四日市建設部・三重県企業庁・同北勢水道事務所・四日市市教育委員会・四日市市八郷地区市民センター・八郷地区連合自治会・伊坂町自治会・伊坂台自治会・山村町自治会・千代田町自治会・広永町自治会・北水台自治会・地元地権者の皆様
- 10 本書が扱う発掘調査の原因事業は、近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市JCT建設事業である。
- 11 調査の費用は、日本道路公団中部支社が負担した。
- 12 本書が扱う発掘調査の資料並びに出土遺物等は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。

本文目次

I 前言	1
1 調査の経過	1
2 調査の方法	3
II 位置と環境	4
1 地理的環境	4
2 歴史的環境	4
III 調査の成果	7
1 概要	7
2 遺構と遺物	7
IV まとめ	10

図版目次

第1図 調査区位置図 (1:2,000)	3
第2図 遺跡位置図 (1:50,000)	4
第3図 調査区地区割り図 (1:500)	5
第4図 遺構配置図 (1:500)	5
第5図 平成14年度調査区東壁土層断面図 (1:80)	6
第6図 平成11年度調査区北壁及び東壁土層 断面図 (1:80)	6
第7図 SD1平面図・断面図 (1:100) 及び 出土遺物実測図 (1:4)	7
第8図 SD2平面図・断面図 (1:100) 及び 出土遺物実測図 (1:4)	8
第9図 出土遺物実測図	9
第10図 遺跡周辺地形図 (1:20,000)	10

写真目次

図版1 調査区遠景 (南から)	12
平成11年度調査区全景 (北から)	12
図版2 平成11年度調査区全景 (西から)	13
平成11年度調査区全景 (南から)	13
図版3 平成11年度調査区最終面 (北から)	14
平成11年度調査区最終面 (南から)	14
図版4 平成14年度調査区調査前風景 (南から)	15
平成14年度調査区全景 (南から)	15
図版5 SD1 (南から)	16
SD1 遺物出土状況 (南から)	16
SD1 遺物出土状況 (西から)	16
SD2 (東から)	16
SD1 遺物出土状況 (西から)	16
旧河道遺物出土状況 (北西から)	16
図版6 出土遺物 (1)	17
図版7 出土遺物 (2)	18
図版8 出土遺物 (3)	19

表図版目次

第1表 出土遺物観察表	11
-------------	----

I 前言

1 調査の経過

古代東海道は、『延喜式』（兵部省）に記載があるのとおり、鈴鹿駅（現：関町新所）から河曲駅（現：鈴鹿市山辺町）を通り、朝明駅を経て榎撫駅（現：多度町戸津）に至るルートとなっている。朝明駅の比定地は確定されていないが、当時の駅間里程（約16km）を考慮すると、菟上遺跡・西ヶ広遺跡の間の谷筋から嘉例川沿いに北上し、多度大社へ続く南北方向の谷筋にあたる県道四日市多度線付近が想定されるのである。この県道四日市多度線と近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）のちょうど交差するところにおいて、四日市JCT建設および県道四日市多度線の改良工事が行われることになり、工事に伴う緊急調査が行われた。また、調査区南西に位置する西ヶ広遺跡で大型掘立柱建物を中心に計画的に配置された建物群が確認されたことから、朝明駅前の候補地と考えられてきたため⁶、駅路として古代東海道を伊坂町付近に想定することになったのである。

この想定に基づき、平成10年から平成14年にかけて発掘調査が行われた。平成10年度の範囲確認調査では、伊坂城跡と菟上遺跡に挟まれた谷水田に、谷を東西方向に横断するように、直線に幅2mのA(32m)・B(56m)・C(40m)・D(8m)のトレンチ(計136m)を設定した。このうちAトレンチ東端部の県道沿いにおいて、水田床土の直下で、灰黄褐色を呈し、粘質を帯びてよく締まった厚さ10cmほどの道路遺構の可能性のある硬化面（道路遺構の可能性を持った面）を検出した。この層の下の黄褐色土層から7世紀代の土師器甕や須恵器杯身などが出土し、その下の黄褐色土層上面でピットを検出した。Bトレンチ西半からDトレンチおよび谷のやや奥まった位置のJ(22m)・K(20m)のトレンチ(計42m)については、流水の氾濫による堆積を繰り返して形成された厚い砂利層となっており、遺構・遺物は確認できなかった。調査の結果、Aトレンチ東半では7世紀代の遺構・遺物が確認できたことから、遺跡範囲内と考えられた。

平成11年度にはAトレンチを含む778m²の範囲を

本調査した。この時、県道沿いに土器を含む硬化面の広がりを確認した。また、県道改良工事にに対し、J・Kトレンチ北東のL(26m)トレンチによる範囲確認調査を行ったが、J・Kトレンチと同様で、流水の氾濫による堆積を繰り返して形成された厚い砂利層となっており、遺構・遺物は確認できなかった。

平成12年度は、平成11年度調査区から150m北に位置し、地形的には2つの開析谷の合流点に相当する県道の北方延長地点付近で、M(70m)・N(80m)・O(125m)の3本のトレンチ(計275m)を設定し、範囲確認調査を行ったが、流水の氾濫による堆積を繰り返して形成された厚い砂利層となっており、遺構・遺物は確認できなかった。県道工事に伴うP(15m)トレンチでの調査結果も同様である。このことから、東海道の遺構はより西側の部分（伊坂城跡側）に存在する可能性が高いと考えられた。

平成13年度は、調整池に関する範囲確認として、11年度調査区の北側隣接地域において、事業地内に県道と並行する南北方向のE・Gトレンチとそれに直交するF・H・Iトレンチ(計400m)を設定し調査を行った。調査の結果、Eトレンチの東側において黄褐色の粘土岩盤を確認し、そこで幅80cm、深さ60cmほどの溝を検出した。溝の埋土からは、飛鳥から平安時代と考えられる土師器甕片・須恵器片が出土した。溝の西側には、礫混じりの締まった灰黄褐色粘質土層が見られ、平成11年度検出の硬化面につながるものと考えられたが、県道から離れた西側は大半が流路となっていた。Eトレンチにおいて唯一検出できた溝遺構も、北方では削平を受けている様相を呈しており、調査可能範囲はごく限られた部分になると判断できた。

これを受け、調査最終年度となる平成14年度は、硬化面を検出した平成11年度調査区と隣接する北側において、平成13年度の範囲確認調査で検出した道路側溝の可能性のある1条の溝と硬化面を含む区域を中心に489m²の調査区について本調査を行った。4年間にわたる調査面積は延べ計2,217m²であった(第1図)。

調査日誌 (抄)

[平成10年度範囲確認調査]

平成11年	
2月2日	A～Dトレンチ掘削
2月3日	精査
2月4・5日	雪のため作業中止
2月8日	E・Fトレンチ掘削
2月10日	A・Cトレンチ精査
2月12日	埋戻し
2月15日	Bトレンチ拡張部実測・調査終了

[平成11年度本調査]

平成11年	
8月25日	表土除去開始
8月26日	排水用側溝掘削(須恵器出土)
8月30日	Aトレンチ断面測量
8月31日	表土掘削終了・遺構検出開始
9月2日	全面5cm掘り下げ
9月7日	雨天のため作業中止
9月9日	遺構検出・全面精査
9月10日	精査・遺構写真撮影
9月14日	雨天のため作業中止
9月16日	排水対策
9月20日	雨天のため作業中止
9月21日	タワー設置・調査区写真撮影
9月22・24日	雨天のため作業中止
9月27日	遺構再検出・遺構カード作成
10月1日	タワー設置・写真撮影
10月4日	下層掘削開始
10月13日	壁面精査・土層分析
10月14・15日	写真撮影
10月18日	下層検出
10月20日	遺構写真撮影
10月25日	断面図作成・重機掘削で下層確認
10月26日	埋戻し開始

[平成12年度範囲確認調査]

平成12年	
11月7日	試掘位置測量
11月13日	調査開始・重機掘削・平面精査
11月14日	重機掘削・壁面精査・断面精査
11月15日	セクション実測・写真撮影
11月16日	一部埋戻し
11月17・20日	セクション実測・写真撮影
11月21日	深堀確認後実測・写真撮影・埋戻し

[平成13年度範囲確認調査]

平成13年	
10月15日	表土除去・人力掘削
10月16日	実測・写真撮影、表土除去
10月17・18日	雨天のため作業中止
10月22日	実測・写真撮影
10月23日	遺構検出
10月25日	断面精査、写真撮影
10月26日	実測、一部埋戻し
11月20日	重機・人力掘削精査
11月21日	写真撮影・実測、埋戻し

[平成14年度本調査]

平成14年	
9月6日	調査区の設定
9月9日	表土除去開始
9月12日	遺構検出開始
9月17日	作業中止
9月20日	平面精査
9月25日	遺構掘削
9月26日	青木哲哉先生現地指導
10月2日	壁面精査
10月3日	旧河川掘削、下層確認
10月8日	遺構面整正、タワー設置
10月9日	写真撮影、タワー解体
10月10日	実測・写真撮影
10月16日	調査終了
10月18日	現地引渡し

2 調査の方法

調査区は、国土座標の第IV座標系にあわせて、座標値のX=-106,900、Y=57,600を起点に4m×4mを1単位としてグリッドを設定した。各グリッドは北西隅を原点とし、本調査区の西から東へは1から算用数字で、北から南へはAからアルファベットで表示した(第3図)。

調査にあたって、表土除去は重機を用いて行い、包含層および各遺構の掘削は人力で行った。

遺構番号は、ピット以外について調査区全体で通し番号を与えた。既に概報などで報告されている番号はすべて改称し、本報告で採番し直した。ピットはグリッドの中で独立して1から通し番号を付した。

また、範囲確認調査時のトレンチについても同様に、あらかじめ付した記号を正式なものとした。

写真撮影は、遺構写真にはモノクロネガとカラーリバーサルフィルムを用い、35mm・ブローニー・4×5判を使用した。また、適宜35mmカラーネガも併用した。遺物写真には、ブローニー判のモノクロ

ネガを用いた。調査区の全体写真撮影は各調査年次に、タワーを建ててその上から撮影を行った。

遺構実測および測量は、土層図も含め1/20の縮尺で人力により行った。

実測した遺物は、実測図との照合ができるよう遺物と図面の双方にRを付した番号を与え、報告書掲載遺物には、さらに報告書と同じ番号を付した。

(松田珠美・水本龍治)

(註)

① 小玉道明ほか「6. 西ヶ広遺跡」(『東名阪道路埋蔵文化財報告』三重県教育委員会 1970)

小玉道明ほか「西ヶ広遺跡発掘調査報告—D地区—」四日市市教育委員会 1972)

「西ヶ広遺跡」(『四日市市史 第3巻』四日市市 1993)

片岡博「Ⅷ. 西ヶ広遺跡」(『近畿自動車道名古屋神戸線(第二名神)埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』三重県埋蔵文化財センター 2000)

田中久生「Ⅴ. 西ヶ広遺跡」(『近畿自動車道名古屋神戸線(第二名神)埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』三重県埋蔵文化財センター 2001)



第1図 調査区位置図(1:2,000)

II 位置と環境

1 地理的環境

当遺跡は、四日市市伊坂町字重地に所在し、桑名市境の朝日丘陵に深く入り込む開析谷に立地する。

北勢地域は、西に鈴鹿山脈が南北に連なり、断層崖に起因する急峻な東斜面の麓には、低平な台地・丘陵が海岸近くにまで広がる。鈴鹿山脈から流れ出る河川は、台地・丘陵の間を切り開いて東流し、伊勢湾沿いに南北に連なる細長い平野を形成する。

朝明川中流域では、北岸の朝日丘陵と南岸の垂坂丘陵の間に約1kmの谷底平野を形成し、下流域では一部が天井化し、沖積低地に自然堤防状の微高地が点在する。また、朝日・垂坂両丘陵の東側沿いに桑名断層が通り、当遺跡はその西側に並行する。

2 歴史的環境

当遺跡を含む朝明川流域の歴史的環境を概観する(第2図)。律令体制下では、ほぼ全域が朝明郡に属し、流域には大規模遺跡が存在した。特に西ヶ広遺

跡(3)では70棟以上の掘立柱建物が確認され、都街跡の可能性が指摘される²⁾。菟上遺跡でも大型の柱穴の掘立柱建物が多数確認され、その計画的配置が注目される³⁾。これらの遺跡の存在が、古代東海道をこの付近に想定する理由の一つともなる。

朝明郡には条里が敷かれ、沖積低地から中流域までの間が肝線N45°Eで統一されている。長方形の地割が多く、現代まで坪名の残る地もある。

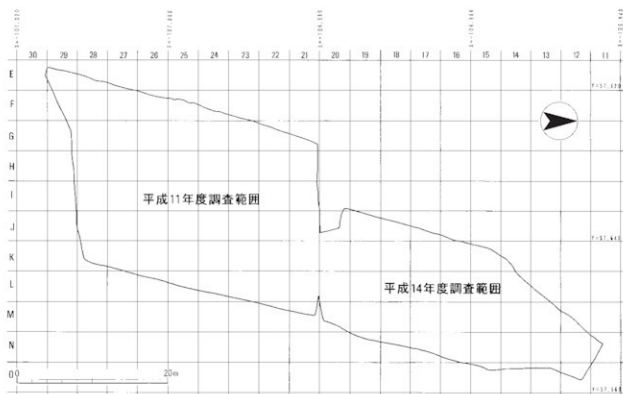
白鳳時代の寺院跡として朝日丘陵北東端に繩生庵寺(24)が所在し、垂坂丘陵の西ヶ谷古窯址群と西ヶ谷遺跡は7世紀代の生産遺跡で須恵器窯と工人集落の可能性が考えられている³⁾。(松田珠美・水本龍治)

(註)

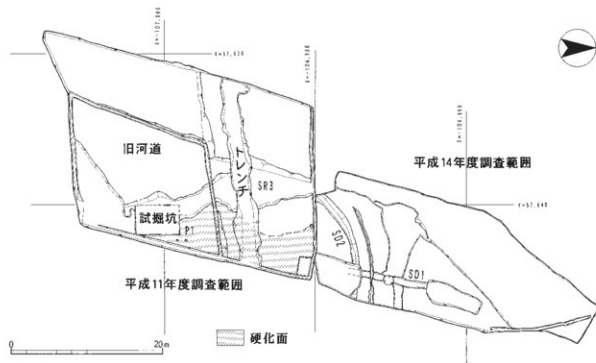
- ① 『西ヶ広遺跡』(『四日市市史 第3巻』四日市市 1993)
- ② 徳積裕昌『IV、菟上遺跡3、まとめ』(『近畿自動車道名古屋神戸線(第二名神)愛知県境～四日市JCT埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』三重県埋蔵文化財センター 2000.3)
- ③ 清水政宏『西ヶ谷遺跡3』、『西ヶ谷遺跡4』(四日市市教育委員会 2002)
春日井恒『西ヶ谷古窯址群』(四日市市遺跡調査会 1992)



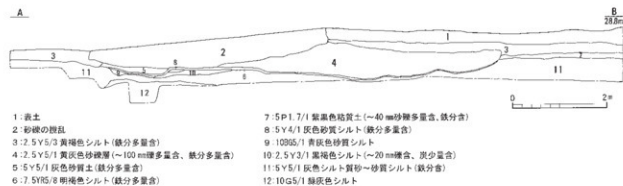
第2図 遺跡位置図(1:50,000)『この地図は国土院発行の2万5千分の1地形図(桑名・菟野)を掲載したものである。』



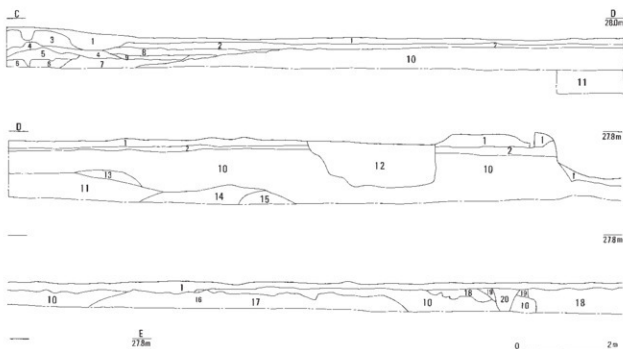
第3図 調査区地区割り図 (1:500)



第4図 遺構配置図 (1:500)



第5図 平成14年度調査区東壁土層断面図 (1:80)



第6図 平成11年度調査区北壁及び東壁土層断面図 (1:80)

III 調査の成果

1 概要

調査区全体が三方から急峻な谷が合流する谷底低地に立地するため、遺構の検出が極めて難しくなっている。調査区の大半が中世以降の河川の氾濫による不安定な流路で、幾層もの礫と粘土の互層になっている。このため、道路遺構として確定できる面は検出できず、側溝の可能性のある遺構もほんの数メートルしか確認できなかった。

2 遺構と遺物

溝 S D 1 (第7図) 平成13年度範囲確認調査によって、南北から東に約8度振れる方向に延びる溝として検出され、平成14年度調査で掘削を行った。この溝は、粘土岩盤を穿って掘られていたが、北に行くにしたがって不明瞭となり、平成13年度の範囲確認トレンチ以北は検出不能であった。この溝の延長上は流路となっているため、遺構が途切れてしまっている可能性が大である。

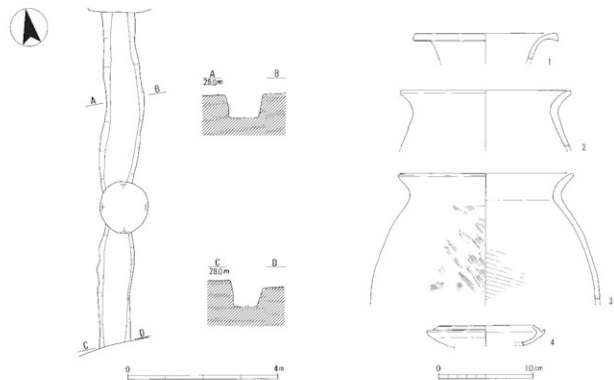
この溝の幅は上部で約0.9m、底部で約0.7m、深

さは約0.7m、確認できた延長は約9.0mである。溝の断面はほぼ垂直に掘り込まれ、中央部に近代の肥溜めが埋め込まれているが、ほぼ直線的に続いている。埋土はすべて灰オリーブ色粘質土で一定しており、底部から約40cm上面に土器片および拳大～人頭大の石が確認された。このことから、溝は一時期に故意に埋められたと推測される。(松田珠美)

出土遺物 1は弥生時代中期の壺であろう。2と3は古墳時代後期と思われる土師器甕である。口縁部を緩やかに短く外反させ、端部に小さく面を作る。4は須恵器杯身である。田辺編年のTK217²⁾に相当しようか。

溝 S D 2 (第8図) 緩やかに弧を描いて延びる溝は、幅は上部で約1.1m、底部で約0.5m、深さは約0.4mである。土層の観察の際に掘り直した痕跡が見られた。溝の埋土から検出した遺物が少ないため、時期は明らかでない。

出土遺物 5は山茶椀である。高台に割痕があり、藤澤編年³⁾Ⅶ型式のものであろう。6も山茶椀で、



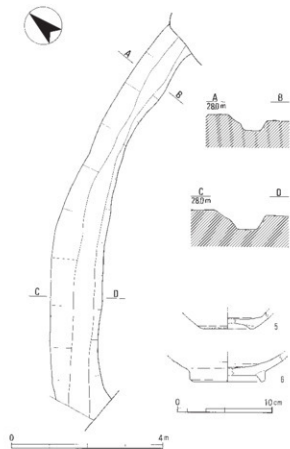
第7図 S D 1平面図・断面図(1:100)及び出土遺物実測図(1:4)

藤澤編年V型式のものであろう。

硬化層 (第4図) SD1の西側に平成11年度調査で検出した硬化面の続きを確認したが、道路として人為的に作られた様相は見られなかった。

出土遺物 7～9は、奈良時代前期の土師器甕であろう。10・11は古墳時代後期から飛鳥時代前期の須恵器杯身であり、12・13は古墳時代後期から飛鳥時代の須恵器杯で、12は橙色である。15・16は奈良時代前期の須恵器杯身であろう。17は奈良時代後期から平安時代前期の須恵器壺であろう。18・19は飛鳥時代後期の須恵器高杯であろう。20は灰軸陶器の皿でK14の2型式³⁾に相当しようか。21は山皿で藤澤編年V型式に相当しよう。22～25は山茶碗である。23と25は藤澤編年VI型式で、22はVII型式、24はVIII型式であろう。

中世流路SR3 (第4図) 平成14年度調査区の北西から緩やかに弧を描きながら、平成11年度調査区の南東方向へ流れていた中世の流路である。埋土は洪水に伴う砂礫を主とする粗粒の堆積物である。



第8図 SD2平面図・断面図 (1:100) 及び出土遺物実測図 (1:4)

出土遺物 26は飛鳥時代の須恵器甕で、27は奈良時代から平安時代前期の須恵器杯身であろう。28は灰軸陶器の椀でK14に相当しよう。29と30は山茶碗である。29は藤澤編年VI型式で、30はVIII型式であろう。31は青磁の椀で、32は天目茶碗である。

旧河道 (第4図) 旧河川の度重なる氾濫により、様々な時代の遺物が流れ込んでいる。

出土遺物 34は古墳時代後期から飛鳥時代の土師器長胴甕で、35は飛鳥時代の土師器甕であろう。36は飛鳥時代から奈良時代の須恵器甕で、37～39は飛鳥時代の須恵器杯の身と蓋であろう。40は瀬戸美濃灰軸陶器の鉦皿である。41は瀬戸の丸椀で、内面底部に花文が施される。42は瀬戸美濃系大窯の時期の播鉢で、内面に使用痕を残す。43は常滑の壺であろう。44は山茶碗で藤澤編年VI型式であろう。45は近世陶器の丸椀である。46は鉄軸の香が椀であろう。47の銅銭は寛永通宝である。

包含層 (第1図及び第4図)

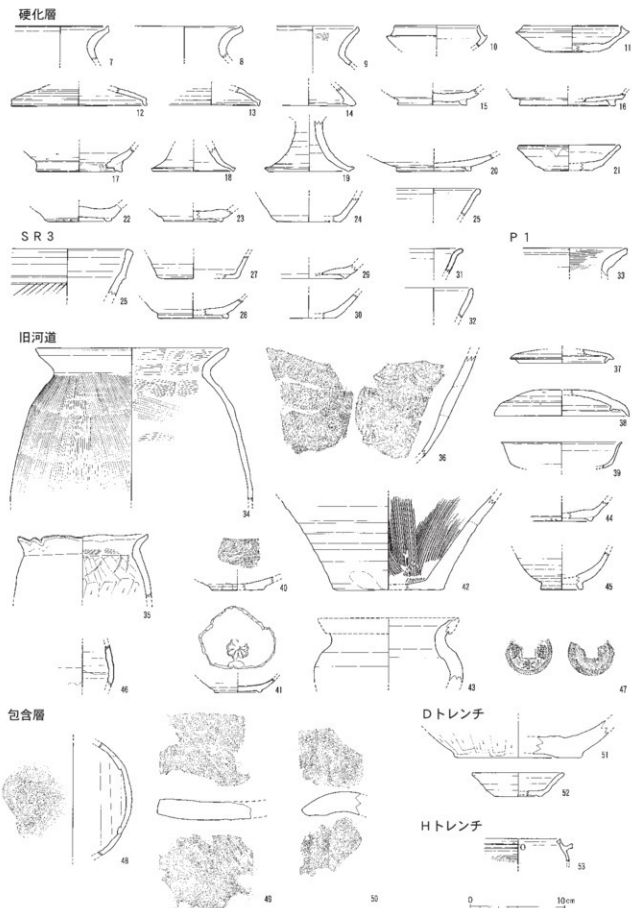
出土遺物 平成11年度調査区の出土遺物は、48が須恵器の横瓶で、49が布目平瓦、50が軒平瓦である。

Dトレンチの出土遺物は、51が常滑の甕で、52が瀬戸美濃の鉄軸椀皿である。

Hトレンチの出土遺物は、53の土師器羽釜で穿孔が残る。(水本龍治)

(註)

- ① 田辺昭三『須恵器大成』(角川書店 1981)
- ② 藤澤良祐『山茶碗研究の現状と課題』(『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター 1994)
- ③ 斎藤孝正『東海地方の施軸陶器生産—猿投窯を中心に』(『古代の土器研究—律令的土器様式の西東—3』古代の土器研究会 1994)



第9図 出土遺物実測図 (1:4) (47は1:2)

IV まとめ

古代官道は、律令体制下において中央集権国家を維持するために不可欠なものであった。都と地方を結び、物資運搬道路・軍事道路として重要な役割を担っていたと考えられる。これらの官道については、各地で行われた近年の調査事例により、直線的に構築され側溝を持つ大規模道路であったことが報告されている。

静岡県曲金北遺跡で発掘された古代東海道は、直線延長350m、幅2～3mの両側溝を備え、心々間12m、路面幅は約9mを測る大道である^①。山陽道では高槻市の今城遺跡や兵庫県の高地遺跡で道幅10mの道路遺構が検出されている。また、東山道では群馬県の下新田遺跡で側溝の心々距離12mの遺構が確認されている^②。

これらの調査結果から見て、谷あいをぬう特殊性を考慮しても、東海道には相応の道幅と側溝が備わ

っていることが想定される。しかし、調査区内で検出された溝は幅約80cmで官道側溝とするにはやや不十分といわざるを得ないものであった。各地で検出されている官道の幅を考慮して、6m以上西側の区域にもう一方の側溝を求めたが、流路に攪乱され確認することはできなかった。

本調査区を地理的に分析された青木氏の指摘によれば、東に位置する菟上遺跡に沿うように大きくは3段階の堆積が考えられるが、小規模な氾濫の痕も多く、中世以前の地形が残存している可能性は低いとのごとくであった。

また、一般的な道路遺構の路面特徴である人馬の足跡痕や波板状面（枕木やコロの圧痕）も、硬化面とする部分に認められなかった。

ゆえに総合的判断として、古代東海道といえる遺構は確認し得なかったことになる。

その一方で、近代の水田畦道として利用されていたものが、側溝を持つ中世の生活道路であった可能性を指摘できる。SD2は近世の旧耕作田段階で側溝を持つ道であったと考えられるが、側溝の断面観察からさらに古い時期の堆積層も確認できた。ここからは伊坂城跡とほぼ時期を同じくする遺物が出土しており、少なくとも中世において側溝を持つ道として機能していたことをうかがわせている。

(松田珠美)

(註)

- ① 「曲金北遺跡(遺構編)」(『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第68集』1996)
「曲金北遺跡(遺物・考察編)」(『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第92集』1997)
- ② 『古代交通研究』創刊号～7号(古代交通研究会編1992～1998)
「特集 古代の道と考古学」(『季刊考古学』第46号1994)



第10図 遺跡周辺地形図(1:20,000)

図録番号	実図番号	発掘期	発掘種	グリッド	遺構	口径	跡高	遺積	形状・調査	色別	粘土構成	残存度	備考
1	9-03	弥生土層	壺	M1.7	SD.1	14.8	残存2.9		横割により不明	外面 緑2.5YR6/6 内面 白5.5YR7/1	粗	口縁部1/12	
2	9-02	土師器	壺	M1.9	SD.1	18	残存4.9		横割により不明	外面 黄褐色10YR6/6 内面 白5.5YR7/1	粗	口縁部1/12	
3	9-01	土師器	壺	M1.9	SD.1	18.3	残存13.4		内外面ロコナツグ・ハケメ(磨製)	外面 黄褐色10YR6/6 内面 白5.5YR7/1	粗	口縁部1/12	
4	8-05	弥生器	研身	M1.9	SD.1	12.6	残存2.2		外面ロコナツグ・自然釉 内面ロコナツグ	外面 黄褐色10YR6/6 内面 黄褐色10YR6/6	粗	口縁部1/12	
5	9-05	陶器	山形瓶	K2.0	SD.2		残存1.8	5.2	外面ロコナツグ・足付高台(粉散焼)	外面 緑1.5YR4/6 内面 灰白5/9	中々粗	底面3/12	
6	9-04	陶器	山形瓶	K2.0	SD.2		残存2.9	7.3	外面ロコナツグ・足付高台・柄付ヘラケリ 内面ロコナツグ	灰白5/9	中々粗	底面3/12	
7	2-03	土師器	壺	K2.2	硬化層				外面ロコナツグ(磨製)	外面 白5.5YR7/1 内面 白5.5YR7/1	中々粗	口縁部1/12	
8	2-06	土師器	壺	L.2.4	硬化層				外面ロコナツグ 内面ロコナツグ・ハケメ・ナデ(磨製)	外面 白5.5YR7/3 内面 白5.5YR7/1	中々粗	口縁部1/12	
9	5-04	土師器	壺	L.2.3	硬化層				横割により不明	灰白5YR/2	中々粗	口縁部1/12	
10	4-04	弥生器	研身	L.2.3	硬化層	9	残存2.3		内外面ロコナツグ	黄褐色10YR7/1	中々粗	中々良	口縁部1/12
11	8-01	弥生器	研身	K2.3	硬化層	10.6	残存2.8		外面ロコナツグ・ロコナツグ 内面ロコナツグ	黄褐色10YR7/1 黄褐色10YR7/1	中々粗	中々良	口縁部1/12
12	2-07	弥生器	研身	L.2.4	硬化層	14.2	残存1.0		内外面ロコナツグ	緑2.5YR6/6	粗	不良	口縁部1/12
13	2-02	弥生器	研身	K2.3	硬化層				外面ロコナツグ・ヘラケリ・ロコナツグ・自然釉 内面ロコナツグ・自然釉	外面 灰5YR/1 内面 灰5YR/1	中々粗	良	口縁部1/12
14	4-06	弥生器	研身	K2.6	硬化層				内外面ロコナツグ	灰白5.5YR/1	粗	不良	口縁部1/12
15	3-01	弥生器	研身	L.2.2	硬化層		残存1.7	高台部 7.5	外面ロコナツグ・足付高台・あきり痕 内面ロコナツグ	灰白5.5YR/1	粗	中々不良	高台部1/12
16	2-04	弥生器	研身	K2.4	硬化層		残存1.4	高台部 8.2	外面ロコナツグ・足付高台・ロコナツグ・ヘラケリ 内面ロコナツグ	外面 白5.5YR7/1 内面 灰5YR/1	中々粗	不良	高台部1/12
17	3-02	弥生器	壺	K2.5	硬化層		残存2.6	8.8	外面ロコナツグ・自然釉・足付高台・ナデ 内面ロコナツグ・自然釉	外面 灰5YR/1 内面 灰5YR/1	中々粗	良	高台部1/12
18	5-03	弥生器	高杯	L.2.3	硬化層		残存2.6	8.4	外面ロコナツグ・自然釉 内面ロコナツグ	灰白5/9	中々粗	中々良	胴部2/12
19	4-05	弥生器	高杯	K2.3	硬化層		残存3.5	8.2	内外面ロコナツグ	黄褐色10YR7/1	中々粗	中々良	胴部2/12
20	2-09	反拗陶器	皿	L.2.1	硬化層		残存1.9	7.6	外面ロコナツグ・足付高台・ロコナツグ 内面ロコナツグ・自然釉	外面 灰白5YR/1 内面 オリーブ黄10YR3/3	粗	中々良	高台部1/12
21	3-03	陶器	山形瓶	K2.5	硬化層	10.3	残存1.7	5	外面ロコナツグ・自然釉・あきり痕 内面ロコナツグ・自然釉	外面 灰5YR/1 内面 灰5YR/1	中々粗	良	口縁部1/12
22	2-05	陶器	山形瓶	K2.4	硬化層		残存1.6	高台部 5.2	外面ロコナツグ・足付高台・あきり痕 内面ロコナツグ	外面 白5.5YR7/1 内面 黄褐色10YR6/6	中々粗	中々不良	高台部1/12
23	2-08	陶器	山形瓶	K2.4	硬化層		残存1.9	6	外面ロコナツグ・足付高台 内面ロコナツグ	灰白5.5YR/1	粗	中々良	高台部1/12
24	4-01	陶器	山形瓶	K2.2	硬化層		残存3.5	12.6	外面ロコナツグ・あきり痕 内面ロコナツグ	灰白10YR7/1	粗	中々良	底面2/12
25	4-03	陶器	山形瓶	K2.2	硬化層		残存2.4		内外面ロコナツグ 口縁部自然釉	黄褐色10YR7/1	粗	中々良	底面2/12
26	4-07	弥生器	壺	J.2.3	SR.3				外面ロコナツグ・華目 内面ロコナツグ	灰白5/9	中々粗	良	口縁部1/12
27	6-03	弥生器	研身	K2.6	SR.3		残存2.4	8.2	外面ロコナツグ・ヘラケリ 内面ロコナツグ	外面 黄褐色10YR6/6 内面 灰5YR/1	粗	良	底面2/12
28	5-01	反拗陶器	筒	J.2.3	SR.3		残存2.0	7.4	外面ロコナツグ・ナデ 内面ロコナツグ	灰白5.5YR/1	粗	良	底面1/12
29	4-09	陶器	山形瓶	J.2.3	SR.3		残存1.4	7.8	内外面ロコナツグ 足付高台	灰白5.5YR/1	中々粗	中々良	高台部1/12
30	5-02	陶器	山形瓶	J.2.3	SR.3				あきり痕	黄褐色10YR6/1	中々粗	中々良	底面1/12
31	6-04	青磁	瓶	K2.5	SR.3				内外面ロコナツグ・施釉	オリーブ3YR6/2	粗	良	口縁部1/12
32	4-08	陶器	天目高杯	K2.1	SR.3				内外面ロコナツグ・施釉	白5.5YR6/4	粗	良	口縁部1/12
33	1-02	土師器	壺	L.2.5	P.1				外面ロコナツグ 内面ロコナツグ	外面 灰白5.5YR/2 内面 黄褐色10YR6/6	中々粗	良	口縁部1/12
34	6-01	土師器	長頸瓶	K2.1	田原道	20.2	残存16.2		外面ロコナツグ(磨製)・ハケメ 内面ロコナツグ・ハケメ・ハケメ(磨製)	黄褐色10YR6/6	中々粗	口縁部1/12	
35	6-02	土師器	壺	K2.1	田原道	13.6	残存6.7		外面ロコナツグ(磨製) 内面ロコナツグ・ハケメ・工具ナデ・ナデ	白5.5YR7/1	中々粗	口縁部1/12	口縁部に残存(多少あり)
36	1-01	弥生器	壺	J.2.4	田原道				外面ロコナツグ・タタキ痕 内面ロコナツグ・胎心内支具痕	灰白5.5YR/1	粗	不良	底部一部
37	9-07	弥生器	研身	N.1.3	田原道	11	残存1.4		外面ロコナツグ・自然釉 内面ロコナツグ	灰白5YR/0	中々粗	良	口縁部1/12
38	9-06	弥生器	研身	N.1.3	田原道	14.3	残存1.8		外面ロコナツグ 内面ロコナツグ	外面 黄褐色10YR6/6 内面 灰5YR/0	中々粗	中々良	口縁部1/12
39	9-08	弥生器	研身	N.1.3	田原道	12.8	残存2.7		外面ロコナツグ・ロコナツグ 内面ロコナツグ	SR.3	粗	中々良	口縁部1/12
40	7-03	反拗陶器	加蓋	1.27	田原道		残存1.4	5.2	外面ロコナツグ・あきり痕 内面ロコナツグ	外面 黄褐色10YR6/6 内面 黄褐色10YR6/6	中々粗	中々不良	底面1/12
41	1-04	反拗陶器	筒	F.27	田原道		残存1.5		外面ロコナツグ・施釉・胎心だし高台・ケズリ 内面ロコナツグ	外面 黄褐色10YR6/6 内面 オリーブ3YR6/2	中々粗	中々不良	底面1/12
42	2-01	陶器	磁鉢	112.2	田原道		残存9.9	8.6	外面ロコナツグ・自然釉・あきり痕 内面ロコナツグ・自然釉	外面 白5.5YR7/1 内面 黄褐色10YR6/6	粗	中々不良	底面1/12
43	1-06	陶器	壺	F.27	田原道		残存4.6		外面ロコナツグ・ナデ(タタキ痕) 内面ロコナツグ	外面 黄褐色10YR6/6 内面 黄褐色10YR6/6	粗	中々良	底面1/12
44	1-08	陶器	山形瓶	J.2.1	田原道				外面ロコナツグ・足付高台・あきり痕(粉散焼) 内面ロコナツグ	灰5YR/1	粗	中々不良	高台部1/12
45	1-03	近世陶器	筒	G.2.5	田原道		残存0.1	3.6	外面ロコナツグ・ロコナツグ・胎心だし高台・施釉 内面ロコナツグ・施釉	外面 灰白5YR/1 内面 黄褐色10YR6/6	中々粗	中々良	底面2/12
46	7-01	陶器	香炉 燗ケ	F.27	田原道				内外面ロコナツグ・施釉	外面 灰黄褐色10YR6/2 内面 黄褐色10YR6/6 黄10YR2/1	粗	良	底部小片
47	5-06	銅鏡		1.27	田原道			銅 1.4					東本通宝
48	7-05	陶器	磁瓶	K2.7	包含層				外面ロコナツグ・底面・タタキ具による文様・縁合によるヘムニシ 内面ロコナツグ・不定形ナデ	外面 灰褐色10YR6/2 内面 黄褐色10YR6/6	中々粗	中々不良	底部小片
49	5-05	瓦	平瓦式	G.27	包含層		残存0.9	最大厚 2.0 内面厚部 0.9		灰5Y6/1	中々粗	中々不良	
50	7-04	瓦	平瓦式	G.24	包含層		残存0.3	最大厚 3.2	外面ナデ 内面ナデ	黄褐色10YR6/6	中々粗	中々良	
51	8-04	陶器	壺	D.トランプ		残存4.0	13		外面ケズリ(磨製) 内面工具ナデ・胎心ナデ	黄褐色10YR6/6 白5.5YR7/1	粗	中々不良	底面1/12
52	8-03	陶器	壺	D.トランプ		残存2.5			外面ロコナツグ・裏り出し高台 内面ロコナツグ	灰白5YR/1	粗	中々不良	口縁部1/12
53	8-02	土師器	研身	D.トランプ					外面ナデ・ハケメ 内面ナデ	黄褐色10YR6/6	粗	口縁部1/12	乳孔あり

第1表 出土遺物観察表

写 真 图 版



調査区遠景（南から）



平成11年度調査区全景（北から）

図版 2



平成11年度調査区全景（西から）



平成11年度調査区全景（南から）



平成11年度調査区最終面（北から）



平成11年度調査区最終面（南から）

図版 4



平成14年度調査区調査前風景（南から）



平成14年度調査区全景（南から）



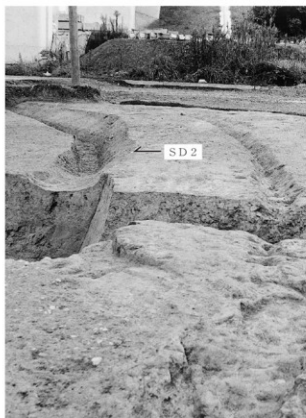
SD 1 (南から)



SD 1 遺物出土状況 (南から)



SD 1 遺物出土状況 (西から)



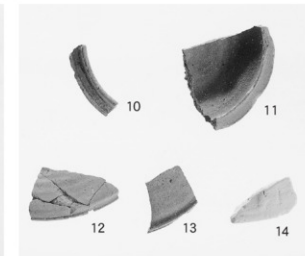
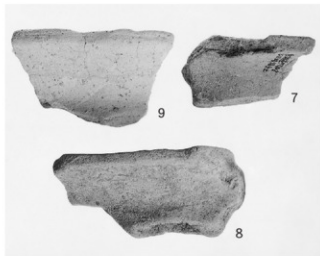
SD 2 (東から)

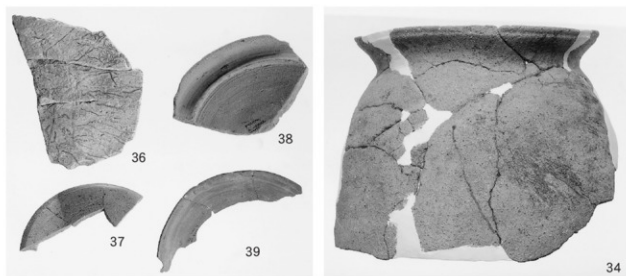
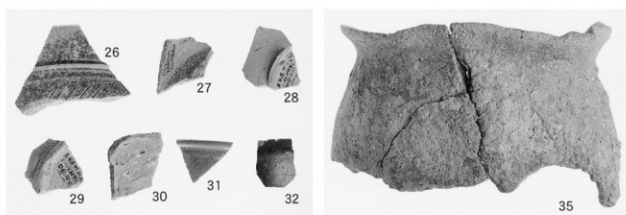
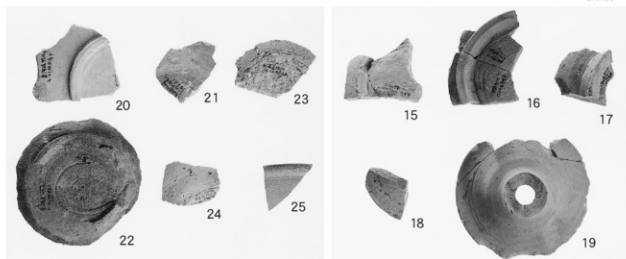


SD 1 遺物出土状況 (西から)

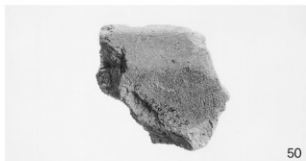
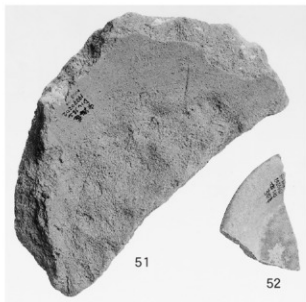
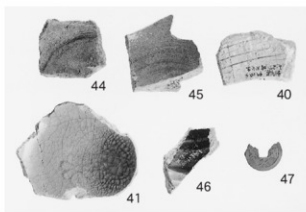


旧河道遺物出土状況 (北西から)





出土遺物(2)



報告書抄録

ふりがな	じゅうちせきはつかつちょうきほうこく							
書名	重地遺跡発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	227-5							
編著者名	松田珠美・水本能治							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503番地 Tel. 0596-52-1732							
発行年月日	2004年2月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ′	東経 ° / ′	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
じゅうちせき 重地遺跡	よっかちしきちやう 四日市市伊坂町	24202		旧 35° 35′ 02″ 04″ 新 35° 35′ 02″ 15″	旧 136° 37′ 54″ 新 136° 37′ 44″	19990202 ～ 20021018	2,217 ㎡	近畿自動車道名古屋 神戸線（第二名神） 愛知県境～四日市 JCT建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
じゅうちせき 重地遺跡	集落跡	飛鳥・中世	溝・中世流路		土師器・須恵器・中世陶器			

じゅうち 三重県埋蔵文化財調査報告227-5
重地遺跡発掘調査報告

2004（平成16）年2月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷 南山文印刷